

## 水 土 里 レ ポ ー ト

投稿月日	令和6年1月26日
タイトル	水源地へ20キロ遠行 開田事業の労を知る
水土里レポーター名	大隅町笠木原土地改良区 書記 小野 富士夫

曾於市の笠木小学校で1月26日、同校伝統（昭和53年開始）の水源地遠行があった。全児童32人が同校から約10キロ離れた大隅・坂元地区にある水源地まで歩き、笠木原台地での稲作を可能にした1世紀前の開田事業に思いを馳せた。



トンネル工事の様子



笠木原地区の水田

同台地に農業用水を引く計画は明治末期、同校の越智鼎三校長が提唱した。1922（大正11）年に完成した用水路（約9キロ）は7割がトンネルという難工事だった。

水路は現在も通水しており、約72ヘクタールの田を潤している。

子どもたちは午前8時40分に出発し、約3時間かけて水源地に到着。現地では、大隅町笠木原土地改良区の重久昌樹理事長が手作業で掘り進めた工事の様子や学校のプール17杯分の水量があることを説明し、転倒ゲートを倒して、せき止めていた水を川に流す様子も見学した。

西園校長先生は、「往復20キロの道のりを32名全員が完歩し、帰校後には、保護者の方々が作ってくださった豚汁を体育館でいただいた。笠木原台地の開田を目指した先人の努力と工夫に思いを馳せながら、その足跡をたどる経験を通し、子どもたちは、一步一步積み重ねることの大切さを学ぶことができたようです。」と話された。



重久昌樹理事長の説明



水源地の様子